

書き下し長編恋愛小説

篝火

かがりび

加堂秀三

篝火^{かがりび}

一九七七年十月二十五日 初版発行

著者 加堂秀三

発行者 増田義和

発行所 実業之日本社

本社 東京都中央区銀座一―三―九

電話 〇三(五六二)四三一―

振替 東京一―三二六 千一〇四

支局 大阪市北区曾根崎中一―六四

梅田第一ビル内

電話 〇六(三二二)一五七三

印刷所 研文社

製本所 共文堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© S. Kadō 0093-363751-3214

／
目
次

[illegible]

装画／大歳克衛
装幀／サン・プランニング

篝火

火

第一章

鞍くら

馬ま

Ⅱ

松茸狩りにいくひとの行列が、尾根道に見えた。

陽の光が澄みわたっていて、明るかった。なつかしい感じのする澄みわたり方であった。松の葉の色が冴えている。

あちこちに、虫の鳴き声が聞こえる。

山あいの田では、もう稲が色づいていた。黄色といっても、黄金色といってもあたらな
い。

おとぎ話で、善良なお爺さんが、犬や雀のみちびきで黄金を手にいれる、そのときの黄金
は、こんなふうではなかったかと思わせる色づきようであった。

稲の色は、日かげほど濃かった。

映画館の座席や、公園の暗がりなどで見ると、哲雄の横顔が、ふだん考えられない男くさ
さになることがあるのを、颯子^{あきこ}は、唐突に思いだした。

「男と女のこととは、どこまで疑っても、疑いすぎることはないと思う」

外国の兵隊がかぶるような、しかし色はカーキ色でもチョコレート色でもなく、紺青の、
よく見れば男っぽいような帽子を頭にのつけたバス・ガイドが薄^{すすき}の株のところ、仲間のガ
イドに話しかけた。

話好きのバス・ガイドは、それが会社の方針なのだろう、極端に短い、タイト・スカート
をはいていた。

はちきれそうな腰の形が、むきだしになっている。膝の裏側がふくらっていて、若若しかった。

濃く口紅をつけた丸い顔は、足腰の印象よりも稚げで、

「どんな男のひとでも結局は男、そう思うわ」

と、そんなふうにつづいていく話が、むしろほほえましかった。

七輪へ手早く熾むさされていく炭火のにおいのなかで、顕子は、またしても哲雄のことを考えた。逢いたかった。

京都へきて、五日たっていた。

半数以上が外国人の、四泊五日の団体旅行は今日おわるのだが、顕子には、明日の鞍馬行きがのこっていた。

京都へ発つ直前に、船崎という美術商会から、顕子の籍をおいている、通訳の協会へきた仕事で、外国の美術品蒐集家に、火祭りを見せる計画らしかった。

——東京へ帰るのは、あさってのことになる

そう思って顕子が向いの山へ眼をむけると、陽ざしの明るいくねくね道に、葱わさの束をかかえていく、若い男が見えた。

松山では、酒盛りがはじまっていた。

ひとびとの姿は見えなかったが、歌声と、手拍子とが聞こえてきた。

こちらの山での酒盛りと、張りあうような騒ぎ方であった。

男の太い喉そのもののような声が、顕子を搏つかちにきた。

さいぜん旅行会社の青年にさされたまま、飲みもしないで手にしていた盃の酒を、顯子は、静かに唇へはこんだ。

そのとき、矢つぎばやに礫^{ついで}でも投げるように、雀が稲田へおり、すぐふたび飛びたった。

夜になってから顯子は、哲雄に電話をかけた。湯あがりの白い指でダイヤルをまわし、まだ呼出しの音すらでないうちから、受話器を、耳へあてがった。

ルーム・スタンドの光が、浴衣の膝さきへさしていた。

いましがたまで廊下を往き交っていた外国人たちも、盛り場へでもでかけたのだろう。ときおりどこかの部屋で水音がするくらいで、ホテルは静まりかえっていた。

一日じゅう笑顔で、姿勢正しく、礼儀正しくしていなければならぬ通訳が、その気疲れのする仕事から、解き放たれる時間であった。

自分で自分の膝さきを、意味もなく撫でまわしながら、顯子は、哲雄が電話にでるのを待った。

その顯子の耳へ、哲雄の、低い太い声が流れこんできた。

それは不機嫌で、愛想のない声で、顯子は恨めしかったが、
「……ごめんなさい、遅くに」

と謝った。そして、あとがつづかず黙りこむと、哲雄が、

「君、そこにひとりでいるのか」

男と一緒にいるんじゃないか、という意味であった。

シングル・ベッドがひとつきりの、狭く美しい部屋のなかを、顕子は、改めて見なおした。

「電話では、京都は見えないからな」

それはしかし、京都からも逗子は見えないのだから、くるしさはおなじはずだったが、通訳という仕事を、特殊なものとして見ているらしい哲雄は、

「君を好きになってから、気持の休まるときがない」

と、つづけた。

「なにしろ、旅行会社の男たちと一緒になんだし、供をする相手は相手に、外国人だし」

実際油断のならない人物もいる旅行業者や外国人たちと、顕子とのあいだに、なにかおこることを願っているのではないか……、そう訊きかえしたくなるようないいがかりであった。

「ひとりですよ」

とも、

「決ってるでしょ、そんなこと」

ともいう気になれず、顕子は、黙りこんだ。そして、なにげなくナイト・テーブルの端へ眼をむけると、ルーム・スタンドの明りのなかに、貴船神社の写真が見えた。夕方顕子が河原町の書店で買った、鞍馬、貴船、それに峯定寺などの案内書であった。

「ふるいお寺らしいということは、わたしにも見当がついていました。牛若丸や、鞍馬天狗のことなども、なんとなく知っていました。でも、『源氏物語』に登場する寺であることまでは、知りませんでした」

と、顕子は、腰がふかく沈みすぎるソファで、初対面の船崎というひとに、鞍馬寺の話をした。

ゆうべ、中京のホテルで、案内書を読んだばかりだということを、隠さずに話した。

「ふるいだけでなく、秘境といっていいような土地だったんでしょね。クラマは暗闇の『闇』、それに『部』という字をつけて、『闇部』と書くのが正しいのだ、そういうひともあるくらいですから。樹木が繁りたいだけ繁って、昼間でも暗い、そんな土地だったんでしょね」

船崎が、静かな声で顕子に応じた。

「……そうですか、風流ですね。亀岡の奥地で、松茸狩りをされましたか」

船崎は三十五、六にも、四十すぎくらいにも見える年恰好で、たいそう落ちついてた。このひとのまえでは、一切の知ったかぶりが通用しないということを、顕子は、はっきりと感じとった。

ふしぎに、気がらくになった。

向きあっただけで勝負の決ってしまう、なにかの勝負のようなことであつた。

ときおり車寄せへ入ってくるタクシーが、派手に弾く午後の光に、無抵抗に肩口や膝さきを斬られつつ、顕子は、船崎にすすめられるまま、珈琲をのんだ。

よほどたつて、顚子がひとの気配を感じ、ふりかえると、背すじをしゃんとのばしたボーイたちのいるロビーに、小柄な外国人が、船崎に手をふり、笑いかけながら立っていた。浮世絵に興味をもっている、イギリスの金持だという。

「ぼつぼつ、行きましようか」

船崎が、ちよつと厳しいほど彫りのふかい顔を顚子へむけた。

顚子は、わけのわからない圧迫を感じた。

その顚子の気持は、船崎が伝票をもって立ちあがり、大きな背中を見せて歩きはじめたとき、嫌悪感にかわった。

鞍馬までいくのは気が重かったが、いったんひきうけた仕事であった。逃げだすわけにもいかなかった。

溪谷ぞいの道を、松明を肩にかついだ男が通った。喉をそらすようにして歩いていく。炎が早い流れや、濡れた石に映り、あたりの暗さを際立たせた。流れの音が高かった。水音というよりは、水に石がころがされていく音、そんなふうに聞こえた。

冷えびえした夜の空気のなかで、顚子は、自分がいま仕事でこの土地へきているのだということを忘れそうになった。

そのとき、まだ年若い男の肩にかつがれた松明が、突然爆ぜて、暗がりへ火の粉をこぼした。

むきだしになっている男の肌を、焼くのではないかと思うような爆ぜ方であった。

しかし、その若い男は、別段熱がるふうもなく歩いていく。

冷たい空気と一緒に煙のにおいを吸いこんで、颯子は、男の姿を見送った。そして、ふと船崎のほうへ眼をむけると、暗がりにも、すこし酒氣をおびた男の顔がうかんでいた。

顔はだんだん遠ざかっていく松明の火をうけて、暗く輝いている。

颯子は、眼をそらせた。

やがて行手に、幾つもの焚火が見えてきた。怪鳥のように、奇怪な貝のように見える木の根や石で囲われた、焚火であった。

家々は、電灯を消していた。

家の底の裏側の、昼間でもそこまでは光がとどくまいと思われるような場所に、火が映っていたりした。

あたり一帯が温かく、煙くさくなっていた。

その煙は、人間に加工されたものや、人間のよごれをつけた物を燃すときのそれとちがい、すこしも不快なものではなかった。

スカートの腰にふれ、上着の胸を撫でにくるいい色をした煙のなかで、颯子は、また船崎のほうをかえりみた。

船崎も、じっと颯子を見ていた。

蹴上のホテルで向きあっているときとちがい、颯子を圧迫したりしない表情であった。滋味があるといったのでは言葉が立派すぎるかも知れないが、船崎は、二十代の青年ではなかった。眼つきにも、頬や顎の線にも、複雑な感じがあった。複雑ななりその顔は、しんと静

まりかえっていた。

大学をでて一年だけ会社勤めをし、思ったって通訳になった、そういう人生経験しかない二十四歳の颯子には、すべてを読みとったりすることのできない、中年男の表情であった。

——このひとの仕事の規模は、どれくらいのものなのだろう

颯子は、火祭りとはなんの関りもないことを考えた。トーチとかフェイスとか、な、お、ざり、な言葉を使って、思いだしたように老イギリス人に話しかけながら、飽きずに船崎のほうへ眼をむけた。

体格の立派な船崎は、仕あげの荒い仏像みたいに見えた。

ある場合には、だいぶちぢれたモミアゲの毛や、大きい、張りのつよい眼などが、ひとの流れに押されて、颯子のすぐ顔さきまで迫ってきた。

酒のせいかな、山道を歩いたためか、熱い軀であった。焚火のほうからつたわってくる温かみとは、微妙にちがう熱さであった。

大松明で注連縄を焼き切る神事までの長さを、颯子は、ひどく恐れた。なかば陶然としつつ、しきりになにかを恐れた。

そのとき、そんな颯子の心の奥を照らしでもするように、真裸にちかい男が松明をかついだままの姿で、彼女のほうへよろけかかってきた。

ふざけているのでも、悪意があつてのことでもなく、そんなふうにするのが神意になつてゐる、そう信じてゐるらしい振舞いだつた。

あつちでもこつちでも、禪ひとつに草鞋をはき、手甲、脚絆をつけた男たちが、似たよう